

本校の SSH 事業の取組が ジアース教育新社発行 全国版教育誌 『文部科学教育通信』に掲載されました！

本校の SSH 第Ⅱ期のプログラムの1つである「ネクストジェネレーション・ミーティング」の取組が、ジアース教育新社発行の全国版教育誌『文部科学教育通信』2024年10月14日号に掲載されました！

SSH 第Ⅱ期のプログラムが全国版教育誌で紹介されるのは、時事通信社発行の全国版教育誌『内外教育』2024年4月16日号への掲載に続いてとなります。

昨年度のベネッセ「VIEW next 6月号」、東京学芸大学「東京学芸大学高校探究プロジェクト 教科横断プログラムワークショップ」など、本校の取組が全国で、たくさん紹介されるようになってきました。

今後も「最先端の学びを日本の西端から創造」できるように、全職員、全生徒で SSH 事業を推進していきたいと思えます。

掲載された記事の内容は、次ページに載せております。



※ジアース教育新社の記事につきましては、無断で転載することを固く禁じます。

文化財を歩く 529

史跡

高島炭鉱跡(端島)

(長崎県長崎市)

文化庁文化資源活用課 文化財調査官

中井 将胤

石炭採掘の活性化に伴い、施設の充実が図られ、段階的に埋め立てられ、拡張が進められるとともにコンクリート護岸が島全体を囲う形となった。また、炭坑従事者や家族も島で生活することで人口も増大し、その家族の住宅を確保するために、鉄筋コンクリート造の高層アパートが密集して建てられた。そのことにより、洋上に浮かぶ姿から軍艦島と呼ばれるようになった。

現在は、埋め立ての各段階を示し、その構造も重要な護岸・擁壁遺構や、石炭を採炭するための穴である第二、三、四堅坑跡、ベルトコンベア跡などの生産施設跡、また、神社や住居跡などが現存している。

整備と公開について

長崎市では高島炭鉱跡の今後の適切な保存・整備・公開活用の在り方を示すことなどを目的に「史跡高島炭鉱跡整備基本計画」を策定し、保存および活用のための修復・公開活用事業を計画的に実施している。

端島炭坑跡については、完全な現状維持が困難であることから、世界遺産としての顕著な普遍的価値への貢献度等を踏まえ、優先順



端島(軍艦島)

高島炭鉱跡について

高島炭鉱跡は、長崎県長崎市の高島、中ノ島、端島の三島に所在し、幕末から明治初頭の「高島北溪井坑跡」明治期の「中ノ島炭坑跡」明治から昭和にかけての「端島炭坑跡」からなり、近代日本の石炭産業の成立と発展を知るうえで貴重な重要な遺跡であることから平成二十六年十月六日に国の史跡として指定された。さらに「高島北溪井坑跡」および「端島炭坑

跡」は、世界遺産である「明治日本の産業革命遺産」の構成資産として登録された。

端島について

端島は、長崎港から南西に約一八kmの沖合に位置する。南北に約四八〇m、南西に約一六〇m、周囲約二二〇〇m、面積約六万五〇〇〇㎡という小さな海底炭坑の島で、一八一〇年から昭和四十九年(一九七四)まで稼働した。端島は「公開・活用されている。民間事業者が運航するクルーズ船を利用して、長崎市が整備した見学エリアに限り上陸することが可能であり、史跡の一部を見学することができる。」

端島(軍艦島)へのアクセス

端島(軍艦島)へ上陸するには各船会社が運航している軍艦島上陸ツアーに参加する必要がある。乗船に関する予約・お問い合わせ等は、各船会社まで。※ただし、天候等により上陸できない場合がある。

端島の保護の取組事例

「軍艦島(端島)」をテーマに地方と首都圏の高校生による協働探究プログラム「ネクストジェネレーション・ミーティング」(大村高校 探究SSH企画部主任 川久保晃一)

平成三十年度からスーパースペースハイスクール(SSH)に指定されている長崎県立大村高等学校(校長 満行洋介)では、令和五年度より長崎大学工学研究科技

階で「軍艦島を今後どうすべきか」について、自分の考えをまとめておく。

研修一日目

生徒間協議(事前課題発表)

研修二日目

午前 軍艦島上陸クルーズ

午後 文化庁・元島民・長崎市役所観光政策課・長崎市役所世界遺産室・出水亨氏による、軍艦島に関する講義

研修三日目

午前 発表に向けた資料づくり

午後 各班の発表

事後学習 代表班の発表

軍艦島は、保存をするためには多額の費用が必要である。また、劣化が進んだ建築物などは世界遺産の登録対象外であり、保存の優先順位は低く、崩壊を防ぐことは難しいのが現状だ。クルーズについても天候の影響を受けやすく、観光客の受け入れ人数にも限度があることもあり、観光資源としても課題が残る。故郷を残したいという元島民の思いもあり、軍艦島を今後どうしていくべきか、行政も含め手探りの状況である。このような正解のない課題について、次代を担う地方と首都圏の高校生が協働することの意義は極めて高いと考えられる。



研修2日目軍艦島上陸